

アーネスト・サトウの神道観

明治神宮出仕

中西正史

はじめに

幕末の開国以降に來日した欧米人の中で、はじめて神道を學術的に研究し、論文にまとめたのは大英帝国の外交官アーネスト・サトウであった。本稿では、アーネスト・サトウの神道研究の知られざる貢献を再評価し、同時に彼の研究が明治の欧米人社会においてどの程度、およびどのような影響力を持ち得ていたのか確認していきたい。

一、生涯

一八四三年六月三十日、イギリスのロンドンに生まれたアーネスト・サトウは、わずか十六歳でロンドンシティカレッジに進学。一八六一年六月、最年少でイギリス外務省日本語通訳生試験に合格した。翌年九月、イギリス外務省の日本語通訳生として來日。その後主に日本において外交官とし活躍し、一八六八年にはかつて同じ通訳生として同僚だった日本書紀英訳者アストンら同期に比べ給与が倍以上の日本語書記官に昇進、一八八四年一月には総領事とし

てシヤムに赴任。その後ウルグアイ弁理公使・モロッコ特命全権公使を経て、一八九五年にはイギリス日本特命全権公使という形で再来日を果たした。その後駐清公使等を歴任し、一九〇六年には日本政府より勲一等旭日章を授与された。同年に外交生活を引退した後は、枢密顧問官、ハーグ国際仲裁裁判所イギリス代表等を歴任した。晩年は有名な回顧録『一外交官の見た明治維新 (A Diplomat in Japan)』を出版するなど著作に倦むことなく、一九二九年八月二十六日に八十六歳の生涯を終えた。

彼が外交人生を始め、またその大半を過ごした地が、極東において開国を果たしたばかりの日本であった。『一外交官の見た明治維新』は来日より王政復古までのサトウ自身の動きをまとめた自伝であるが、ここには外国人として初の天皇拝謁に随行したこと、幕府に代わる新しい政権のあり方について自論をまとめた『英国国策論』が倒幕派に影響を与えたこと、薩長の要人と接触したことなどが生き生きと書かれている。このような忙しい中でもサトウが怠らなかつたのが日本語の習得と日本研究であった。彼は一八六五年に早くも「日本語の書体の様々の様式」(『Various Styles of Japanese Writing』)を発表しているし、同年四月には通訳官に昇格するなど、日本語習得能力のほどが見て取れる。そして三年後の六八年には早くも日本語書記官に昇進。その日本語能力は、駐日外交官として抜群のものであったといえる。⁽¹⁾この中でもサトウの神道研究の成果が如実に見て取れるのは一八七二年の日本アジア協会設立以後であり、一八七四年二月発表の「伊勢神宮 (The Shintau temple of Ise)」を始め、翌年には神道観を端的に表した「純粋神道の復活 (The Revival of Pure Shintau)」そして一八七九年には延喜式祝詞の一部を翻訳・研究した「古来の日本の祭祀 (Ancient Japanese Rituals)」などを発表している。

サトウの日本研究の原点は、後に詳しく触れるが一八六六年に無署名の記事として匿名で発表した「英国国策論」である。日本の政体についての説明、自論について著したこの論の中でサトウは当時の支配者徳川幕府の権威を否定、外交上の日本の主権者に当たる統治者を天皇としている。つまりサトウの日本研究とは、幕府を支えたフランスの意

向に対し、薩長側よりであったこの当時のイギリスの政策に即し、一貫してその政策に沿い外交官の職務として皇室を日本の統治者として認知る主張を行ったものであり、したがって日本の伝統や精神的權威の研究は彼の在日外交官としてのキャリアを大きく支えていたといえる。

二、伊勢神宮

こういった彼の偉業の中で、彼が神宮を公式参拝した始めての欧米人であり、また欧米人として始めての神宮についての学術論文を記したことは今日広く知られているとは言い難い。彼は一八七二（明治五年）十二月二日に外国人として伊勢神宮を初めて公式に参拝、また一九七四年（明治七年）二月十八日には日本アジア協会に論文「伊勢神宮（The Shintau temple of Ise）」を口頭発表し、後に外国人が神道の中核として神宮を意識する契機となった。

日本アジア協会とは当時ロンドンにあった王立アジア協会の支部としても位置づけられ、ここから欧米の日本の神道に対する学術的研究も始まったといえる。それではなぜ神道研究が外交官であるサトウによって始められたのか。それには当時、アジアにその植民地を拡大しつつあった大英帝国の対外戦略が見え隠れする。英国の基本方針は地域研究による徹底的な各国事情の下調べをもとに通商、植民化の可能性を探り、自国の利益につなげていくというものである。このようなことを考えていくと、大英帝国の対日戦略の最前線にいる在日代表部日本語書記官サトウにとって、改めて国家の宗祀と定義された伊勢神宮を实地検分し、神道に関しての知識を蓄積しておくことは職務上当然の如く重要な任務であった。実際彼の神道に関する論文も、参拝客として聖地である神宮に触れたという感動やその見聞よりもむしろ職務としての情報収集という在日赴任外交官としての日本研究という要素が強く感じられる。

その後、サトウ論文より十五年程のち『タイムズ』紙の東京通信員も神道に対して関心をもち、伊勢神宮を取材し

神宮に関するコラムを載せている。⁽²⁾この通信員が『タイムズ』紙上で神道に関する特集記事を組んだのは一八八八年の十二月になってからであったが、彼の記事の中には、明らかにサトウの神宮論を参照にした箇所が数多く見受けられる。当時、外交政策のための極東研究の推進という観点から、公使パークスはじめサトウやアストンといった公使館員が後に役員を務めるなど、イギリス公使館が積極的に支援しつつ運営していた日本アジア協会はイギリス人社会における日本学の最高権威であったので、公使館との関係も深い通信員が取材の過程で公使館の運営する学会において神道論議の発端となったサトウの「伊勢神宮」を意識、参照したことは当然といえよう。

通信員は、記事の序文において以下のように書き始めている。

Chief of all holy places in the Empire, the Ise shrines are to the Shinto believers of this realm what Mecca is to the Moslems or Jerusalem to the Christian Greeks.

帝国のすべての聖なる地の頂点に立つ伊勢神宮は神道を信ずる者にとってはイスラム教徒にとってのメッカ、ギリシャのキリスト教徒にとってのエルサレムと同様なものである。⁽³⁾

この記事における神宮紹介の書き出しは、初めての神宮論文であるサトウの以下の文章を大いに意識していたものと見てよいだろう。

The Temple of Ise called by the Japanese 'Ito-dai-jin-gu, or literally the 'Two great divine palaces,' are situated in the department of Watarai, at a short distance from each other, they rank first among all the Shinto temples in Japan in point of sanctity, through not the most ancient, and have in the eyes of Japanese the same importance as the Holly Places of Palestine in the eyes of the Greeks and Armenians, or Mecca in those of the Mahometans.

日本語で「両大神宮」及び文字通り「二カ所の崇高なる神の住まい」と呼ばれる伊勢の神宮は度会府に位置し、両宮は互いに至近の距離にある。それらをもっとも古いわけではないが、神聖であるという点で日本のすべての

神社の中で頂点に位置し、ギリシヤ人、アルメニア人らにとつてのパレスティナの聖地、もしくはイスラム教徒にとつてのメッカと同じように日本人にとつては重要なものである。⁽⁴⁾

またこの新聞記事の特徴は、サトウ論文ほど詳しくないが、神宮社殿に関しても詳細な記述がなされているところにある。この記事ではサトウ論と同様に、人の目に触れることのない御神体についての記述も見られる。

For each there is a spruce-wood box, shrouded in a wrapper of plain white silk and covered by a wooden cage, which again is completely hidden under a voluminous silken mantle.

それぞれ四方には四つのごきれいな木製の箱があり、白い絹の布切れによつて包まれた上に木製の木枠が囲んであり、その上分厚い白い幕によつて完全に覆われている。⁽⁵⁾

サトウの論文における同じ箇所は以下のようにもっと詳細に説明されている。

Each mirror is contained in a box of hinoki, furnished with a piece of cloth said to be white silk.

The mirror itself is wrapped in a brocade bag, which is never opened or renewed, but when it begins to fall to pieces from age, another bag is put on, so that the actual covering consists of numerous layers. Over the whole is placed a sort of cage of unpainted wood with ornaments said to be of pure gold, and over this put on, so that the actual covering consists of numerous layers.

Over the whole is placed a sort of cage of unpainted wood with ornaments said to be of pure gold, and over this again is thrown a sort of curtain of coarse silk, descending to the floor on all sides.

それぞれの鏡は檜の箱に納められていて、四つの箱に四つの蓋と八つの取手が備わっている。その箱は低い台の上に安置されていて、白い絹と言われる布きれによつて覆われている。鏡自体は錦織りの袋に納められていて、それは今までに一度も開けられたり取り替えられたりしていない。しかし、それは年と共に劣化し始めるので、

実際には別の袋を重ねて袋で何重にも覆われている。全体を覆うように純金で装飾された無着色の木枠があり、ここに荒い絹の幕らしきものが全面に垂れ下がっている。⁽⁶⁾

このように、この通信員の記事は簡略ながらもサトウの「伊勢神宮」を意識したとみられる箇所が数多く見られる。ただ、外交官として忠実に検分をし、神宮に関する私的な感想を避けたサトウにたいし、この記者は、取材を終え東京の路についたときの気持ちなども残している。

There is a something about the place, its people, its scenery, and associations, not to be lightly relinquished or easily forgotten. But holidays have their limits, even as the columns of The Times- of which latter fact I feel at this moment guiltily and painfully conscious. So we had to drag ourselves away one early morning, and be in turn.

その場所、人、風景、教団(神社)といったものは簡単に忘れたいが、休暇は限られていて「タイムズ」のコラムもある。後に私はこのとき(帰らなくてはならないことが)辛く、悲しい気持ちになった。それで私は朝早く自分を無理に引っ張って帰路につかなくてはならなかった。⁽⁷⁾

このようにこの通信員は神道、ことに神宮に深く関心を持ったと見られ、翌一八八九年の十二月にも赴任地の東京より神宮に足を運び神宮の式年遷宮に関する特集をまとめている。⁽⁸⁾

三、サトウの神宮参拝

これに対してサトウの参拝経緯は、如何なるものであったのか。サトウ参拝当日の日記には、初めての公式参拝に關する記述が残っている。

Dec 2 Got up by candle light and started at 7:30 for the Geku. Back again into Miokemachi, Furuichi, Ushida.

ni and Uji over the Tsuzugawa to Naiku. Received by the Daiguji or chief Minister of the Shrine Kita Koji (a Kuge) and the Shoguji Urata Nagatami whom I had met in Yedo. We were not admitted inside the gate which comes first after the Torii in the outer enclosure. We were the first foreigners who had visited the holy place.

(十二月二日)早朝に起き、七時半に外宮に向かった。つづいて、妙見町、古市、牛谷、宇治を過ぎ、五十鈴川を渡つて内宮に向かう。(中略)大宮司北小路随光(公家)と、江戸で会つたことのある少宮司浦田長民の出迎えをうける。(中略)我々は外苑の鳥居を入つた最初の門から先に進むことは認められなかった。(中略)我々はこの聖なる地を訪れた最初の外国人であつた。

このように大隈使節団に同行したサトウ一行は外交官の公的な訪問でもあり、外苑(第一鳥居)より内側に入れなかつたものの、大・少宮司の出迎えを受けるなど、神宮から最大限の敬意をもつて待遇された。しかし「外苑の鳥居を入つた最初の門」とは、今日の域内配置からすれば神楽殿手前の第二鳥居のことであり、明治以前では僧侶が神前に進めず対岸の僧尼拝所から遙拝した事情となんら変化を見せていない。このようにこの当時の外国人参拝に対する神宮の態度は極めて冷淡なものであつた。一八七〇年(明治三年)五月二十一日、英国軍艦及び測量船が志摩の的矢に入港した際、両宮参拝を願ひ出た。これに対して神宮は度会縣を経て太政官に伺ひ出た結果、神宮権禰直等の激しい反對もあつて、太政官より「外国人参入之儀ハ英国公使へ御談判之筋モ有レ之候條、其旨ヲ以テ相断可_レ申事」と沙汰やみになつた。その根拠として外国人の肉食という生活習慣、キリスト教徒としての雑穢が挙げられている。

外国人ノ人ニ於ケル、常ニ異教ニ浸潤シ、雑穢ニ混ジ、獸肉ヲ食フ、此ノ如キ者ヲシテ宮中ニ参入セシメバ、神慮ヲ冒シ奉ルノ甚シキ、其恐勝ゲテ言フベカラズ⁽¹⁰⁾

それにしても明治初期、なぜ神宮がかくも注目を浴びるに至つたのであろうか。明治二年(一八六九年)三月に史上初めて神宮への公式参拝を敢行した明治天皇は、同年十月の第五十五回式年遷宮の後、再び明治五年(一八七二年)五

月に神宮を参拝している。明治という新たな時代意識から、皇室の祖先神（天照大御神）への崇敬が高まり、皇室及び神宮が明治という檜舞台に躍り出る情況の中、壬申（明治五年）九月十三日に北小路大宮司・浦田少宮司より、嵯峨教部卿以下に「外国人来拝之儀付伺」が提出された。それによれば鳥羽港に碇泊した外国官吏以下が突然参拝を申し出た時、いかに対処すべきか問い合わせている。教部省では太政官の本会議（明治政府の最高決議機関）である正院に諮り、「向後、参拝申出候節ハ御国人同様之振合ヲ以差許可申」、「参拝不致者ハ板垣御門内入不許」との二点を十月二十七日に決定した。その上で同省は神宮に対して、「外国人参拝之儀」につき次のとおり指令してきた。

指 令

第一条

外国人参拝之儀、兼而本省依前紙之通被達候條、本宮照準瑞垣御門相開、同御門外^ニ而^レ拜礼為^レ致、在勤官員、直垂着用、手水・先導等可^レ致事

但、外国人罷出候、別紙本省之達書示、拜礼歟之儀相尋、拜礼候、瑞垣御門外、拜見候、荒垣御門外迄参入之段可^ニ申聞、尤拜礼不^レ致、拜見罷出候者手水不^レ及、荒垣御門外迄先導可^レ致事、

第二条

外国人突然宮中立入候、見受候、在勤官員罷出、前條拜見之振可^ニ取扱^一事

第三条

本廳伺出、指令受後、可^ニ取計旨、外国人申入置、指令可^レ守事

第四条

瑞垣御門御幌、可^ニ相渡^一事
壬申十一月八日^(U)

指令内容によると外国人が正式に参拝を要望した場合、神宮神職による手水と誘導を行い、正宮に最も近い瑞垣御

門を開扉し、その門外にて拝礼せしめるとある。また拝見に限る場合、荒垣（外玉垣）御門外まで神職が誘導するものである。この取り扱いは荒垣御門参入の拝見については、今日の一般参拝とも照応して、極めて妥当なものと思われる。しかし瑞垣御門外の参拝については、それが後代には皇太子に限る取り扱いぶりからも破格の待遇であったことは明白である。このような神宮側の対応の変化については、当時波紋を呼んだ浦上信徒弾圧事件に対する欧米側の反応、また一八七二年（明治五年）八月には宇治山田市に語学を教授する宮崎洋学校が開設されるなど、対外関係や開化意識の高まりが要因であったとみて間違いない。⁽¹²⁾この通達から一ヶ月足らずの十二月二日、サトウが公式参拝したにせよ瑞垣御門外にはとても進めず、第一鳥居外で退いた状況を考えると、当時の神宮域内では未だ指令が徹底していなかったと見なすべきであろうか。⁽¹³⁾

ともかくもこのような伊勢参拝についてサトウは、「伊勢神宮」巻末において以下のように結んでいる。

The Temples of Ise were until lately unknown to foreigners. During a voyage of inspection made by the Japanese Government steamer Thabor in December 1872 to the lighthouses on the southern coasts, she put into Toba harbour, and arrangements were most liberally made by Mr. Okuma, Councillor of State, and Mr. Yamao, Vice-Minister of Public Works, for giving to the party of Europeans on board an opportunity of visiting these temples. I had the good fortune to be a member of the party, and endeavoured to observe as much as the limited time at our disposal would allow of, but no doubt there still remains much to be investigated by future travellers.

伊勢神宮は最近まで外国人に知られていなかった。一八七二年十二月、日本政府の蒸気船タボール号によって南岸の灯台を視察する航海の際、船は鳥羽湾に寄港し、参議大隈氏と工部大輔山尾氏によって、同乗のヨーロッパ人達にもこれらの神社を訪問する機会が提供された。私は、この団体の一員になれて幸福だった。そして私は、我々に許された時間の限り観察しようと務めた。しかし、将来旅行者によってまだ調査されるべき余地のあるこ

とは間違いないであろう。⁽¹⁴⁾

ここから当初は太平洋南岸の灯台視察を目的としていた船旅の途上に、政府高官であった大隈・山尾両者の好意から思いもかけず神宮参拝が叶い、しかも日本の聖域への感激から、論文を作成するに至ったという事情が明らかである。そして、このサトウの神宮参拝は、六年後の一八七八年十一月に英国の駐日代表である公使パークスが神宮を公式参拝するまでの地盤造りともいえるのである。

以上のように、英国外交官サトウが神宮に参拝した経緯やその研究論文、また新聞が地域分割的性格の強い英国において、あえて日本という全国紙的役割に比較的近い『タイムズ』の中でサトウの影響を受けた神道に関する新聞記事の掲載時期、その内容を考察してみた。全国紙で神道に関する特集記事を組むということは神道が英国において一般に認知され始めた時期を考察する上で客観的なバロメーターになるし、またこれらの記事の詳細度、方向性から、英国人がどのような神道に関する情報を得られたのか考察できると考えたからである。この中で伊勢神宮を始めて公式参拝したサトウや『タイムズ』の通信員が自分の目で神宮まで足を運びしつかりした実地検分から神道に関する情報を発信していったことは特筆すべきことといえよう。

このサトウの「The temples of the Ise」は、欧米人が日本の固有宗教である神道の本宗ともいべき伊勢神宮の価値を見出すきっかけを作ったが、効果はそれにとどまらず、サトウがこの論を日本アジア協会で口頭発表した際、同席した人々の中で神道に関する論議が行われ、会場はさながら神道シンポジウムの様相を呈した。その意味では、欧米人の神道研究の火付け役を果たしたともいえるのである。

四、純粹神道の復活

サトウは伊勢神宮に関する論文を発表した一八七五年、国学に関する研究「純粹神道の復活」(The revival of pure Shintau)を日本アジア協会で口頭発表、これは一八八二年に『日本アジア誌』上において論文の形となった。タイトルの中で神道の表記が Shintau となっているのは、日本語通訳生は来日前北京で漢字を習得するという当時の英国外務省の研修方針により、北京語の知識を得たサトウが道の字を北京語読みしたものであろう。

この論文は、日本語の語学力堪能なサトウの国学に対する研究の集大成とも呼べるものである。国学、すなわち復古神道を「純粹神道の復活」という名の論文において考察した古事の研究にとりくんだ四大人つまり荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤の四者を取り上げ、それぞれの著書の解釈を加えつつ、彼らの人生から思想までを論じている。

この書においてサトウは神道の成立から幕末の復古神道へ至るまでの流れについて簡単に触れながら、復古神道の代表人物である四大人をそれぞれの経歴、その主な思想や学問、お互いに与えた影響についてそれぞれの章で述べている。

まず国学の祖とも呼ばれる、荷田春満の国学への取り組みを紹介している。

Anyone who desires to study Japanese literature should first acquire a good knowledge of Chinese, and then pass over to the Man-yetu-shifu, from which he may discover the ancient principles of the divine age... In ancient times, as the poet expressed only the genuine sentiments of his heart, his style was naturally straight forward, but since the practice of writing upon subjects chosen by lot has come into vogue, the language of poetry has become ornate and the ideas forced, thus producing a labored appearance. The expression of fictitious sentiment about the relations of the sexes and miscellaneous subjects is not genuine poetry.

日本文学を学ばんとするものはまず漢文の十分な知識を習得し、それから万葉集へと進むことによって神代の

昔の原理が明らかになるかもしれない。(中略) 古代において、詩は人々の率直な気持ちを表現する才気あふれる優れたものばかりであったが、文字(漢字)が使われるようになってから主題は、はやりすたりで選ばれるようになり、詩の言葉は飾り立てられ、理性が目立つなど、詩の創作は物理的になってくる。恋愛や様々なことに関する仮想の表現は優れた詩とはいえない。⁽¹⁵⁾

このようにサトウは、まず漢文の十分な知識を得てから古代人の素朴な気持ち述べた万葉集の歌謡を讀解しその解釈研究を通じて古学びをするという荷田の国学の学習法を紹介している。この中で、古代日本人が大陸の文字を持って詩を創作するようになってから心からの素朴な表現ができなくなり優れた詩を創作できなくなっていたという当時隆盛であった儒学者とは逆の春満の見解を紹介しているのは興味深いところである。

ところで漢文を学習した後、日本の古文書に取り掛かるという春満の研究軌跡は当時のイギリス外務省の方針に沿って、まず北京で漢字を学習した後、日本に赴任して日本語を学び、その後文献考証により日本文化を研究していたサトウの研究遍歴にも重なり興味深くもある。

しかし、一般には国学四大人の祖として荷田春満をあげるのに対し、サトウは以下のような本居の文章を引用しつつ、復古神道、つまり国学特有の大陸とは違う日本独自の学問という意識を強く主張したという点で、自国のアイデンティティを示す国学という認識から重要なのは真淵以降という認識をここで表している。

The branch of study which consists of investigating the ancient language and modes of thought with a mind perfectly freed from Chinese influences was initiated by Mabuchi.

唐心より完全に離れた気持ちを持つて古語と古意を学んでゆく学派は真淵によって始められた。⁽¹⁶⁾

彼はこのような復古神道を担った四大人の考察・研究を通じ、その主眼とするところを説明した上でそれらをどのような指標にしつつ研究、更にはどのように評価すべきかという客観的な考察についても述べている。

The object of this paper being merely to give some account of the views entertained by a school of modern writers on Shin-tau, no attempt has been made to determine which of their opinions are in accordance and which at variance, with the real nature of this religion. It is, however, manifest that such of their conclusions as are founded on the alleged infallibility of the ancient records or on any premises which involve the miraculous or supernatural must for those very reasons be discredited; and the real nature and origin of Shin-tau must be decided by the usual canons of historical criticism. The most effectual means of conducting the investigation would be a comparison of the legends in the Ko-zhi-ki and the Ni-hon-gi, and the rites and ceremonies concerning which the Norio and other parts of the Yen-gi Shiki afford so much information, with what is known of other ancient religions. A correct interpretation of the extant texts is the first requisite, and in arriving at this the philological labors of Mabuchi, Motowori and Hirata, imperfect as their results must naturally be, will be of immense assistance... By carrying out this programme, and following in the footsteps of the native scholars, it would be alone possible to check their work and at the same to arrive at correct conclusions, for it is very clear that the last word has yet to be said on the subject of Shin-tau.

この論の目的はこの宗教の根源について神道の近代学者達の学派によつて考察された見方に対して何ら異論を加えようという試みがあるわけではなく、ただ概略したものである。しかしながら彼らの結論には明らかに古事における信憑性の疑わしいものが含まれていたり、信賴性の薄い奇跡や超自然のものが混じっているので、彼らの神道の根源説は歴史学的批判にさらされるに違いない。もっとも効果的と思われるのが神話である古事記、日本紀や祭祀祭礼を記述した祝詞、そして延喜式などほかに古代宗教について知られる多くの情報を提供してくれるであろうものを比較調査するというやりかたである。現存する文献の正確な解釈がまず必要であり、それから

結論からして当然不完全であろう真淵、宣長、篤胤のこれら労力を費やした作業へと進むべきだ。(中略)このような過程を履行し、国学者達注釈を辿っていきただ彼らの作業を確認し同時に正しい結論にたどりついて初めて、神道の目的というものが明らかになるであろう。⁽¹⁷⁾

この記述にも見られるように神道研究に対してサトウがとっていた態度は、自らの文献考証というしつかりした研究を基盤にしていて極めて客観的で、なおかつ上記の著作などをつうじ、神道をこれから研究していこうという後に続く欧米人の研究者に対して明確に方向性を示していることが伺えよう。

更には、この頃の欧米人のなかで、国学に関する書物にこのような分析を加えたのはサトウにおいて他におらず、この後国学を取り上げた欧米人の論はサトウの先駆的な英字による神道論文を参考、参照せずにはいられなかった。このように彼の論文はさまざまな神道研究の根本となつていたのである。前の章でも触れたように『タイムズ』紙が伊勢神宮に対して特集記事を取り上げたのも彼の神宮に関する考察を意識したものであるなど、欧米人の神道研究の先駆者としてサトウが当時欧米ことにイギリスの学会に及ぼした影響は計り知れない。

五、サトウの祝詞研究

サトウの「純粹神道の復活」における正しい文献解釈を通じて神道の精神を追及していこうという姿勢は、彼の延喜式祝詞に関するの翻訳研究である *Ancient "Ancient Japanese Rituals"* にも通じている。

彼はこの著作において延喜式卷八の四時祭祝詞の祈年祭から出雲国造神賀まで二十七本の祝詞をリストアップし、そのうちの祈年祭、広瀬大忌祭、春日祭、龍田風神祭、平野祭、久度古開、六月月次祭、大殿祭、御門祭までの七つの祝詞を三回に分けて英訳しつつ注釈を添えている。そしてそれぞれの祝詞について、背景や知識の紹介、式次第と

いう二部構成で説明している。その中では祝詞特有の語彙を英単語に置き換えるような翻訳の作業だけではなく、群書一覽、大祓詞後訳、大祓詞前後訳、祝詞正訓、天津祝詞考などといった解釈本も紹介されており、サトウがこれらの後世に書かれた解釈本も参考にしつつ緻密な研究を行ったことが伺える。更に彼は、この祝詞を研究していく意義として具体的に以下のように述べている。

In studying the primitive religion of the Japanese people there are two principal avenues open to us. We may examine the myths which are contained in the Nihongi, Kozhiki and other early records of tradition, and by analyzing the names of the gods and other supernatural beings who figure in those legends, discover the relation in which they stand to each other and the true signification of the stories concerning them. In this way we should gain a general idea of the accepted belief concerning the gods, that was current at the time when those records were compiled, that is to say, if the expression be admissible, of the theory of Shintau, and at the same time it would become possible to show how and in what order these myths were evolved. But of not less importance than this inquiry would be an investigation into the practical side of Shintau, by considering the attitude which the worshipper assumed towards the objects of worship, the means which he adopted of conciliating their favor or averting their anger, and the language in which he addressed them... An important part of every performance of Shintau rites, not less so than the presentation of offerings to the god or departed human spirit, is the reading or recitation of a sort of liturgy or ritual addressed for the most part to the object of worship, in which the grounds of this worship are stated and the offerings are enumerated.

日本人の古代宗教を研究していくには我々には二つの主な方法がある。一つは日本紀、古事記を含む神話やそれ以外の古代記を調べ、神々の名称やそれらの伝説に現われた超自然的存在を考察し、それら神々を含む神話の

信憑性と彼らの存在性との本当の関係を発見することである。この方法の中では我々はそれらの記述が完成した当時受け入れられていた概略的な神観念に関する一般知識を得るべきである。もし神道の概念としてその存在が認められうるならば、同時にこれらの神話が展開していった順序とどのように展開していったかが示しうるであろう。このように述べてきたことに劣らず重要なことが崇拜対象に対して崇敬者が考えている心情、つまり神々が怒るのを避け、神々の歓心を得るために神々に向けて唱える言葉に対する考察である。⁽¹⁸⁾

このように日本の古代宗教、つまり神道研究の方法として、神話・古事研究と並んで大切なものとして祝詞研究をあげている。そして、神道研究のための古典英訳としては、同じ英国人であるチェンバレンの『古事記』、アストンの『日本書紀』が知られるが、後に詳しく触れるように神話。古事研究と並んで祝詞研究が神道研究において欠かせないとの立場から延喜式祝詞の翻訳をしたサトウの業績は前者に劣らず大きなもので、今後しかるべき評価がなされるべきである。そしてサトウの延喜式祝詞翻訳が『日本アジア協会誌』に掲載されたのは一八七九年のことであり、一般に外国人の古典翻訳・解釈による神道研究の道を開いたと言われる東京帝国大学言語学教授チェンバレンの英訳『古事記』が一八八二年、かつてのイギリス公使館の同僚であったアストンの英訳『日本紀』が一八九六年に掲載されたことに比べても、サトウの神道文献の英訳・研究及びその着眼点はより古く、サトウは明治初期における欧米人による神道の学術研究の創始者、または欧米人による英訳を通じての神道学の文献考証の草分け的存在といふべき人物であった。

事実チェンバレンは自著英訳『古事記』においてサトウの研究をこう評価している。

It will be as well to have the facts put into language more intelligible to the European student. This having already been done by Mr. Satow in his paper on the "Revival of Pure Shinto", it will be best simply to quote his words.

欧米学生には事柄を翻訳したほうがよく理解できるであろう。このためには既にサトウ氏によつて著された「純粹神道の復活」より引用してくるのが一番よいであろう。⁽¹⁹⁾

このチェンバレンの神道研究のアドバイスからも分かるように、サトウは極東外交官という職務の中で伊勢神宮の参拝・研究、神道思想として重要な国学の研究とその文献考証、また神道の最も重要な祭祀の爲の延喜式祝詞の英訳を行った人物であるのみならず、アジア協会誌に様々な研究成果、また後の神道研究者の爲に様々な指標を残したことから欧米人における神道研究の萌芽期において最も重要な人物であつたことは間違えなない。

しかし、彼の研究は主に横浜にあつた日本アジア協会において発表され学術誌に掲載された程度であり、欧米一般人に対しては殆ど知られることはなく、神道を欧米に知らせたという役割においては、サトウの論文の後『タイムズ』に記載された一連の神道関係記事、英文で出雲地方などの神社を神秘的に描写し、その日本の情景を欧米人に知らしめた文学者小泉八雲ことラフカディオ・ハーンなどの陰に隠れ、外国人による神道研究者としてのサトウの業績が認知されているとは言い難いものがある。

六、神道研究における視点

ところで欧米人による神道研究の先駆者サトウと同じ英国人であるチェンバレンやアストンといった後発の神道研究者の文献翻訳や研究を見ていくと一貫してみられる視点がある。それはことにサトウ、アストンという二人に共通する外交官としての任務に密接に関係してくる。つまり彼らが多忙な中、語学や政治状況の収集のみならず神道の研究を行つていたことは、外交官の職務として天皇制、しいては日本の国体なるものを分析するためであつた。それは翻訳を通じての彼らが着目した以下の視点からも伺える。

サトウは、先程の“*The Revival of Pure Shintau*”においても大陸の影響から完全に分離して古代の言語と思想を研究する学派の一つは真淵によって始められたと定義し、真淵の『国意考』に見られる意識について指摘している。

In the Koku-I-kau we have Mabuchi's views upon the worthlessness of the Chinese philosophy... He argues that while the Chinese for ages past have had a succession of different dynasties to rule over them, Japan has been faithful to one uninterrupted line of sovereigns. Every Chinese dynasty was founded upon rebellion and partricide... A philosophy which produced such effects must be founded on a false system.

国意考における真淵の見方は、儒学は評価に値しないというものだ(中略)彼は、古代中国において異なる王朝が前の王朝を征服、支配してきたが、日本は不可侵の単一の統治者をもっていると論じている。すべての王朝は反乱と反逆が……(中略)儒教がそのような影響を与えてきたのは間違った仕組みに違いない。⁽⁸⁷⁾

日本という国は、王朝が移り変わる大陸と違い古来より天皇制という悠久的な国体があり、このような国体を支える復古神道が存在することに着目し、以上のような真淵の大陸から独立した日本という概念を説明しているのである。彼の神道研究におけるそのような視点は以下の論文“*Ancient Japanese rituals*”の延喜式英訳を通じての神道研究にも見られる。

The Praying for Harvest, or Toshigohi no Matsuri, was celebrated on the 4th day of the 2nd month of each year, at the capital in the Zhingikuwan or office of the Worship of the Shintau gods, and in the provinces by the chiefs of the local administrations. At the Zhingikuwan there were assembled the ministers of state, the functionaries of that office, the priests and priestesses of 573 temples, containing 737 shrines, which were kept up at the expense of the Mikado's treasury, while the governors of the provinces superintended in the districts under their administration the performance of rites in honor of 2,395 other shrines...

祈年祭は毎年二月四日に京の神祇官や各国の国司によって執り行われてきた。神祇官では国家の大臣や役人、官幣社七三七社の内、五七三社の神職達が集い帝の幣帛を賜り、各地の国司はそれぞれの地方の国幣社二三九五社で行われる祈年祭を担当する⁽²¹⁾。

このようにサトウ論文からは、祝詞研究において祝詞の英訳や式次第の説明のみならず、祈年祭が京の神祇官によって執り行われた後、神祇官より幣帛を賜った全国の官国幣社の神職達がそれぞれの地方の神社に幣帛を持ち帰り中央とともに全国各地で同じ祈年祭が執り行われる状況を説明することで、中央の神祇官における皇室祭祀であった祈年祭が地方に広がっていき、天皇を中心とした中央と地方の一体化に貢献するということ祭祀の役割、または機能に対するの考察すら窺える。

そもそもサトウが一八七二年に行った伊勢神宮公式参拝は、当時明治政府の要職にあつた大隈重信の視察団随行という形での公務として実現したものであり、六年後の一八七八年十一月に、公使パークスが在日英国代表として神宮を初参拝する下地を作ったものともいえる。

十一月英国全権公使内玉垣御門外ニテ参拝(麻誌)

つまり英国政府にとって伊勢神宮は在日英国機関のトップである公使が参拝するほど重要な施設であり、それには天皇の皇祖を祭る伊勢神宮の重要性を英国が認識していたか、もしくはサトウの研究によって認識するに至ったからに他ならない。

以上のように神道研究を通じて皇室やその皇祖を祭る伊勢神宮、日本を大陸と区別したものと捉える国学、そして祭祀といった日本の国体に目を向けた理由は、サトウの職務である外交官と切り離して考えられない。要するに英国が外交政策を行う上で、国体、天皇、そして政治と宗教との関わりは重要であるとの認識があつた。サトウの神道研究を考察する上でこのような背景は見逃せない点である。

七、英国国策論

このようなサトウの神道研究の視点の原点は、一八六六年三月一六日付で、無署名の記事ながらサトウが『ジャバ
ンタイムズ』紙上で幕府に変わる天皇を中心とした政権構想を論じた「英国国策論（和名）」にまで遡れる。

そもそもサトウが来日した一八六二年当時、日本を統治していたのは、衰えつつあったとはいえ欧米人達に大君と
呼ばれていた將軍を中心とした徳川幕府であったため、当然この頃英国は条約の締結など政府間の交渉を徳川政権と
行っていた。しかし、公使パークス随員の日本語書記官として一八六〇年欧米人として初めての孝明天皇謁見に随行
したサトウは、日本における皇室の重要性を再認識する。そして実際の王政復古より遡ること二年前、一八六六年三
月十六日に無署名の記事ながら『ジャパンタイムズ』紙上に「英国国策論（和名）」を掲載した。これが欧米人と
して初めて幕府の権威を否定する見解といわれている。

この国策論における構想は和訳され、各藩の倒幕の志士達に流布されて大きな影響力をもったとされているが、こ
とに注目したいのが大君と呼ばれていた徳川將軍ともう一人の君主である天皇に対するサトウの定義である。まずサ
トウは徳川幕府の政治的な位置付けを次のように明白に説明している。

*It must be borne in mid that the Tycoon, though claiming to conduct the Government of Japan, is in reality, or
was at the time when the first Treaties were made, only the head of a Confederation of Princes, and to arrogate to
himself the title of ruler in a country, of which only about half was subject to his jurisdiction was a piece of ex-
traordinary presumption on his part.*⁽⁸²⁾

大君（將軍）ハ、日本一統ノ君主タルヨウニ最初条約ノ節ニ云シナレドモ、彼ハ只諸侯ノ長ニテ、僅ニ日本半国

ホドノミ領分ナルニ自ラ日本国主ト唱ヘシ、是名分不正ニシテ僭偽ナリ⁽²⁴⁾

If TOKUGAWA is Majesty-what is the MIKADO?... The Shogoon, in fact, is always styled "Highness" by the Japanese themselves and "Highness" he is and no more...

Perhaps, accuse us of pedantry in remarking now that the title of "Tycoon" is one to which the MIKADO alone has right.⁽²⁵⁾

若徳川陛下タルトキハ帝ハ如何ナル者ソヤ(中略)將軍ハ日本人ヨリ常ニ殿下ト呼レシニ、彼自殿下ヨリ上ノ称号呼用ユル事決シテ不当ナリ。(中略)日本ニ大君ノ名ハニツナシ、其名持得ルモノハ只帝一人ノミト思フ我々ヲ咎ムヘキカモシラス⁽²⁶⁾

この記述の上で重要なのが、今まで欧米人が「日本の大君」という呼称を徳川將軍に対して使ってきたのは誤りで、將軍は只の有力な諸侯であつて、その上に立つべきな存在ではないと定義したことである。よつて一八五八年八月に日英間で結ばれた日英修好通商条約における英国女王の“Her Majesty the Queen of the United Kingdom of Great Britain and Ireland”という呼称に対して対等な国家元首という立場で、將軍の“His Majesty the Tycoon of Japan”という呼称で並列され署名されているのは誤りだとして“His Highness the Shogoon”というように改めるべきであると指摘している。⁽²⁷⁾

以下、上記は日英修好通商条約における文面で、下記は、サトウが日本における幕府の立場を考慮して改めるべきとした文面である。このなかで面白いのが、修好通商条約は、英国の Majesty であるビクトリア女王に対して日本の Majesty としての Tycoon ではなく、実際には Highness に過ぎない徳川將軍と結ばれたものであるから、その条約をあえて実効のものとするなら“Between the two countries”という国家間のものではなく、条約の有効範囲はあくまで將軍としての権限、領土の範囲内、つまり“Between their respective dominations and territories”に限られると明記

している部分である。

(日英修好通商条約)

Her Majesty the Queen of the United Kingdom of Great Britain and Ireland and his Majesty the Tycoon of Japan, being desirous to place the relations between the two countries on a permanent and friendly footing, &c
(サトウ案)

Her Majesty the Queen of the United Kingdom of Great Britain and Ireland and his Highness the Shogoon being desirous of placing the relations between their respective dominations and territories on a friendly footing, &c⁽⁸²⁾

The Shogoon, or Sjogoon, or Siegoun, as his name is indifferently spelt, has signed a treaty with the representatives of foreign powers under another and more dignified appellation, to which he has no right... the fatal technical flaw undoubtedly exists that the Yedo potentate has signed a contract to which the letter of the word makes him no party.⁽⁸³⁾

「シヤウクン」ト云ハ、英吉利語ニテ訳スルモカタラサルニ、將軍ハガイコク有司共ト結ビシ条約ニ、己ノ本官ヨリ尊貴ナル大君ノ号ヲ以テ調印セリ。(中略)江戸ノ君主此名ヲ調印セラレシハ、莫大ナル僭偽ニシテ、見ルモノ愚弄シテ信セサル事知ルヘシ。⁽⁸⁴⁾

このように述べた上、更には自ら外交交渉を重ねていくうちに幕府が日本政府の代表としての資格を持たず、諸大名を束ねる行政執行能力もはや持ち得ないという認識を踏まえた上で、これから日本の代表としての交渉相手に天皇を選ぶべきという持論を展開している。

It would not be a political revolution, deposing the Tycoon from the position which he arrogated as head of the Government, for that has taken place already... We have lately seen the Tycoon acknowledge by his actions that

without the sanction of the Mikado they would never be carried out or be recognized by the Daimios, and from this men have naturally and reasonably concluded the Mikado to be the superior.⁽³⁰⁾

強チニ日本ノ君主タルヨフニ偽リシ大君ヲ廢スルト言モ國家ノ顛覆ニハ至ラサルナリ。(中略)天子ノ勅許ヲ得シテ諸侯モ承諾セス条約ヲ取行フ事能ハサルハ明白ナリ⁽³¹⁾

以上のような理由からサトウは日本の眞の統治者“the real rulers of Japan”を天皇としつつ、近代国家間の条約締結を結ぶ日本側代表として、今までの將軍ではなく天皇連合諸大名“the Mikado and the Confederate Daimios”との条約締結が相応しいとしている。この中で、天皇が行政執行能力をまったく有しておらず、象徴的な統治者としてみる故に、行政権を持つ全国の諸侯達との連合体という構想を考えるとところにサトウの実務外交官としての慧眼が窺える。また封建制の下諸侯を束ねる幕府という政体を真つ向から否定し、天皇を西洋における君主と対等なものとし、その下に諸侯が連合体を作るという構想は、英国外交官サトウの近代国家観を如実に表すものであるが、未だ幕府の政権下であった当時、はるか極東の島国で政治的実権を持ち得なかつた天皇と、拡大な領土を版図に収めていた自国の君主とを対等の存在とみなし、条約の再締結を提案するところに外交官としてのサトウの卓越した先見の目が窺える。しかしながら、サトウの定義する Majesty を僭称した徳川將軍との条約であつたが、条約が日本の関税自主権を認めず、日本における英国の治外法権を認めるといふ一方的な所謂不平等条約であり、更には様々な政治的事情絡んだためか、英国外務省においてサトウの条約の原則論が注目され、幕府との条約が無効、または再締結されることはなかつた。

以上のようにサトウはこの論に見られるようにすでに幕末期の一八六六年の段階において日本及び歴史における天皇ひいては皇室の重要性について深く認識し、学術的に考察しようという観点を持ち、明治時代が本格的に始まつた一八七〇年代に外交官の在地研究として、サトウが外交上の主権者である「眞の統治者」と定義する天皇、及び皇室

の日本における重要性を主な論点として神道研究に没頭したのである。

このようなサトウをはじめとして後発のアストン、チェンバレンの三者は、それぞれの立場より神道研究を通じて結果的に日本における国体というものを考察していった。なかでも東洋のある国の一つの宗教を長年にわたって学術的に研究したサトウは、領事部門 *Consular service* の通訳生という領事を上がりのポストとするいわゆるノンキャリア組として外務省に入省しながら、三年後の六十八年には早くも日本語及び日本学のスペシャリストとして日本語書記官に昇進。その日本語能力は、駐日外交官として抜群のものであったといえる。アストンの日本研究家として最も有名な日本書紀英訳出版は、英国帰国後の一八九六年になってからのことであり、この大きな業績は結局外交官としての彼のキャリアに査定されることなく終わった。これらを見てもサトウの出世が如何に特例的なもので、公使館のサトウに対する高い評価が伺える。³²⁾ そして在日公使館勤務中に英国の対日政策にとって重要な研究を数多く行ったサトウは、日清戦争中という大切な時期である一八九五年から五年間、本来はキャリア組である外交部門 *Diplomatic service* のポストである在日英国代表部トップの在日公使、更には日露戦争という重大極面の駐清公使にまで上り詰めるなど、極東外交における頂点を極めた。このような研究後の経歴を振り返っても、サトウの日本研究ことに神道研究は、サトウの私的なものではなく、極東における外交政策を担当する外交官としての公的任務を帯びたものであり、その業績は本国においても十分に評価されたことが十分窺えよう。

ま と め

以上、明治期の英国外交官アーネスト・サトウの神道観、及びその研究の視点などを中心に述べてきた。サトウの神道研究は、まず『タイムズ』の通信員を通じて神道のみならず、国家の宗祀である伊勢神宮の姿をイギリスに伝え、

また後進の欧米人の神道研究者を数多く生み出していった。またサトウの神道研究とは、彼の極東駐在外交官としての職務の一つであり、『ジャパンタイムズ』紙上に掲載した「英国国策論」の中に見られるように日本における天皇の役割を見抜き、その皇室の伝統を支える神道を実直に研究し、数多くの翻訳も手がけた。そういった意味で彼の神道研究が欧米人の神道研究の先駆者として大きな功績を果たしたことは疑いようのない事実であるし、また幕府政權下において既に天皇を近代国家における君主と看做していたその卓越した国家観や君主観も特筆すべきことである。

しかしながら、同じく明治初期に文学的情緒あふれる紀行文などの文学作品を通じ、当時の神社の面影を欧米の人々に知らしめていったラフカディオ・ハーンに対し、サトウの学術性の高い神道研究は、その学術的性格ゆえに公使館及び、日本アジア協会という限られた対象に対して発表されたもので、欧米一般における神道認識への貢献という観点からはハーンには及ばないし、この明治初期における欧米への神道紹介としては今日においてもまずハーンの名前が挙げられる場合が多い。

ただ、本稿でも論じてきたように、サトウの神道論が『タイムズ』記事の神道特集掲載などに大きな影響を与えたことをはじめ、ハーンのように直接的な影響力でないにせよ、サトウの神道観が明治初期における欧米人の神道観形成において大きな役割を果たしていったか、ということをごこれからの研究課題として更に実証していきたい。

註

- (1) 一八六五年一月江戸駐在の英国公使館通訳生(年棒二〇〇ポンド)はサトウの他に、トループ、ウイルキンソン、そしてアストンがいた。約三年後の一八六八年三月にサトウが江戸駐在の日本語書記官として年棒七〇〇ポンドを受け取っていたのに対し、かつての同期であったトループは神奈川領事館の二等補佐官として年棒三五〇ポンド、ウイルキンソンは江戸駐在の二等補佐官として年棒三〇〇ポンド、そして後に日本書紀を英訳するサトウより二歳年長であったアストンは

兵庫領事館の三等補佐官として年俸三〇〇ポンドである。アストンがサトウと同じ日本語書記官のポストについては実に十八年後の一八八六年になってからのことであった。サトウの出世が如何に特例的なもので、公使館のサトウに対する高い評価が伺える（横浜開港資料館蔵、昭和六十年度「幕末の外交官アーネスト・サトウ」展資料より抜粋）。

- (2) 『タイムズ』が、特派員を送ったという記録はこの当時の在日外国人リストになく、おそらくこの人物は、一八六七年英国公使館付武官補として来日し、八一年『ジャパン・メール』紙を手中に収め兼筆をふるい、九二年以降は正式に『タイムズ』の通信員を兼ねたアイルランド出身のフランク・プリンクリー (Frank Brinkley) の無署名記事ではないかと思われる。『英国公使氏夫人の見た明治日本』(淡交社、昭和六十三年三月)によるとプリンクリー大尉は、ジャーナリストとして日本文化に対して実に造詣深く、公使館の武官補として来日した経緯から武官退任後もこの本の作者である英国公使夫人の日記にも度々登場するなど英国公使館との関係も深くサトウの公使館勤務時期とも重なることから、当然サトウ及びその研究に関する見識は当然のことながら十分にあったと考えられる。

- (3) Shrines of Ise, In Japan, (*The Times*, 27 December 1888) Page# col. a
- (4) 'The Shinto Temples of Ise', (*the Transactions of the Asiatic Society of Japan*, [Vol. 2] 1874) pp. 113-39. なおこの「伊勢神宮」和全文は拙訳による。

- (5) Shrines of Ise, In Japan, (*The Times*, 27 December 1888) Page5 col. a
- (6) The Shinto Temples of Ise, (*the Transactions of the Asiatic Society of Japan*, [Vol. 2] 1874) pp. 113-39.
- (7) Shrines of Ise, In Japan, (*The Times*, 27 December 1888) Page5 col. a

- (8) Japan, Shinto Festival of Ise, (*The Times*, 05 December 1889) Page3 col. b. における記者の前文は、以下の通りである。

My story today is of an old-time spectacle appertaining to Shinto- at once the primitive, yet still living and ruling, faith of the Japanese people, and one of the most ancient religions systems in the world. To this it may be added that, as the cere-

monies which I shall describe take place but once in 20 years, and as no alien was present at them in 1869, nor any but myself on the occasion lately ended, the writer of these lines is, and must in the nature of things be for 20 years to come, the sole foreign eye-witness, living or dead, of the great festival of Ise, which is by far the chief and most rare of all its kind in Japan.

- (9) *Salow papers: diaries 1861-1926* (横浜開港資料館蔵。私が利用した横浜開港資料館蔵の日記はすべて複製コピーであり、原文については英国国立公文書館 (The Public Record Office) 所蔵。
- (10) 宇治山田市役所編『宇治山田市史』(宇治山田市役所刊、昭和四年三月) おもに現在の伊勢市の前身である宇治山田市の変遷を扱ったものであるが、外国人の神宮参拝の経緯にも詳しい。
- (11) 神宮司廳編『神宮司廳公文類纂』法制篇(神宮文庫所蔵、明治五年)。この文献には外国人、皇族はじめそのほかの参拝客に関する参拝規定の詳細が載せられている。
- (12) 西田善男著『明治初期における三重県の外語学校』(三重県郷土資料刊行会刊、昭和四十七年二月)。後に宮崎語学校と改名した宮崎洋学校の設立から廃校までの次第をはじめ、明治初年代に県下に多数存在した語学校について詳細に記述している。
- (13) 以上の神宮における外国人の項は拙稿「アーネスト・サトウと伊勢神宮」(神道研究集録第十五編、平成十四年三月)による。
- (14) Shrines of Ise. In Japan. (*The Times*, 27 December 1888) Page5 col. a
- (15) The Revival of Pure Shinto', (*the Transactions of the Asiatic Society of Japan*, [Vol. 3], 1875) pp. 1-98.
- (16) The Revival of Pure Shinto', (*the Transactions of the Asiatic Society of Japan*, [Vol. 3], 1875) pp. 1-98.
- (17) The Revival of Pure Shinto', (*the Transactions of the Asiatic Society of Japan*, [Vol. 3], 1875) pp. 1-98.

- (18) Ancient Japanese Rituals No. 1', (*the Transactions of the Asiatic Society of Japan*, [Vol. 7], 1879) pp. 95-126.
- (19) *The Kojiki-Records of Ancient Matters* (1882) の複製版 Basil Hall Chamberlain Charles E. *The Kojiki-Records of Ancient Matters* (Tuttle, 1981).
- (20) The Revival of Pure Shinto', (*the Transactions of the Asiatic Society of Japan*, [Vol. 31], 1875) pp. 1-98.
- (21) Ancient Japanese Rituals No. 1', (*the Transactions of the Asiatic Society of Japan*, [Vol. 7], 1879) pp. 95-126.
- (22) 神宮司廳編『神宮明治百年史・下巻』(神宮司廳蔵、昭和六十三年十月)
- (23) Non title article (*Japan Times*, MARCH 16th, 1866).
- (24) 『新旧時代』大正十五年四月号(『明治文化研究』二、明治記念研究会、昭和四十七年七月所収)。
- (25) Non title article (*Japan Times*, MAY 19th, 1866).
- (26) 前掲『新旧時代』大正十五年四月号。
- (27) 萩原延壽文『英国国策論 遠い崖—アーネスト・サトウの日記抄』(朝日新聞社、一九九九年三月)二三八頁を参照。
- (28) Non title article (*Japan Times*, MAY 19th, 1866).
- (29) Non title article (*Japan Times*, MAY 19th, 1866).
- (30) 前掲『新旧時代』大正十五年四月号。
- (31) Non title article (*Japan Times*, MARCH 16th, 1866).
- (32) 前掲『新旧時代』大正十五年四月号。
- (33) 統計等『昭和六十年度「幕末の外交官アーネスト・サトウ」展』(横浜開港資料館蔵)より抜粋。